



## フィクションの中のヘンリー・モーガン

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 要, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006245">https://doi.org/10.24729/00006245</a>

# フィクションの中のヘンリー・モーガン

要 弘

## I

ジョン・スタインベック (John Steinbeck) の『黄金の杯』 (*Cup of Gold*, 1929) は、歴史上の人物ヘンリー・モーガン (Henry Morgan) を主人公とした伝記小説である。その副題に、“A Life of Sir Henry Morgan, Buccaneer, with Occasional Reference to History...” とあるように、ときどき史実に触れながら、ヘンリー・モーガンの、バカーニアとしての活躍を描く。15歳で故郷を出立してから、カリブ海的大海賊となり、ジャマイカの副総督となって、生涯を終えるまでを取り扱う。

スタインベックは、ジョン・エスケメリング著『アメリカのバカーニア』 (*The Buccaneer of America*) を種本として、このモーガンの伝記小説『黄金の杯』を書いたが、<sup>1)</sup> 小説である以上、史実に忠実でなければならない理由はない。当然のことながら、スタインベックが描くヘンリー・モーガンの経歴は、史実と異なっているところがある。

石島晴夫著『カリブの海賊：ヘンリー・モーガン』によれば、史実は、次の如くである。

ヘンリー・モーガンは、1635年にウェールズのカーディフに生まれ、1650年から55年までバルバドス島にて年季奉公をしたのち、年季奉公を終えるやすぐにジャマイカ島に行く。1664年にモディフォードがジャマイカ島の総督に就任する。1665年モーガンがグラナダを略奪する。この頃、いとこのメアリー・エリザベスと結婚し、ポート・ロイヤルに新居を構える。1670年海賊船団の提督に帰る。サンタ・カタリーナ島を奪回。(マドリッド条約—イギリスとスペインの植民地境界を決定。海賊行為が禁止される。) 1671年1月パナマを攻略。1675年ジャマイカ島海軍提督の任命を受け、1676年ジャマイカ島に戻る。1680年モーガン提督代行となる。1683年あらゆる官職を罷免される。1688年8月25日、モーガン死す。<sup>2)</sup>

石島晴夫氏の指摘によると、スタインベックの『黄金の杯』と史実との異なる点をあげるとすれば、例えば、副総督の叔父エドワード・モーガンに会った時期をあげることができる。いま一つの例を挙げれば、増田義朗氏によれば、ヘンリー・モーガンは、「ジャマイカ副総督を解任され、その後はジャマイカの大農園主として何ひとつ不足のない生活を送っていたにもかかわらず、人生の目標を失い、大酒を飲んでうさを晴らしながらだんだんと衰えていき、あげくの果てにこの世を去った」<sup>3)</sup> ということであるが、スタインベックはこの事実を取り上げていない。さらに、後に触れることになるが、モーガン自身によれば、モーガンは年季奉公をしたことがないということである。

「カリブ海のスペインの植民地を次々と攻略してスペイン人を震え上がらせた」のはモーガンであったし、「また、カリブ海におけるイギリスの植民地ジャマイカ島を守り通せたのも、

彼の率いる海賊集団の存在に負うところが大きい」のであるが、イギリス人は、海の英雄としてまずネルソン提督とドレイクを挙げ、ヘンリー・モーガンは5位あるいは6位に位置すると考えるらしい。その理由は、当時、海洋で活躍した海賊たちは、絞首刑になるか、戦死か病死であったが、モーガンは、最後には、権力の側に付いて、海賊弾圧を行ったということである。つまり、モーガンは仲間を裏切った海賊の首領ということになる。このことがあって、イギリス人は彼を英雄扱いしないのであろうという。<sup>4)</sup>

## II

『黄金の杯』は、スタインベックの第一作である。多くの作家の場合にそうであるように、ここには、後に現れる彼の作品で用いられることになるテーマばかりでなく、構成上の工夫、技巧などが、既に現れている。

『黄金の杯』は、全部で5章から成り立っている。第1章と第5章を除く第2章、第3章、第4章には、その各章の冒頭の部分に歴史的事実が簡単に紹介され、時代背景が読者に与えられる。時代背景として歴史的事実を記述するスタインベックの狙いは、作品が読者に与える印象である。『黄金の杯』は伝記ではない。あくまで創作であり、小説である。むしろ、史実と『黄金の杯』との余りにも明白な差異は、作者の意図を示唆しているように思われる。所与の史実は、作品にリアリティを与えようとする作者の戦略である。読者は、登場人物たちの生きざまを心の内で追跡し、その背景とともに現われる人物たちの行動の蓋然性に反応するのである。十分な選択が施された後に言及されている歴史的事実は、作者の戦略であるとはいえ、プロットの流れを妨げる働きをして、皮肉にも有効な作用をしているようには見えない。挿入された史実についての説明の部分は、全体の流れを妨げるものであり、読者に不快感を与えずには置かない。これは、使用されている語彙が、少々古くさい——もっとも17世紀という作品の時代背景を意識して、スタインベックが故意に選択しているのであろうが、それにもかかわらずやや古色蒼然の感を免れがたい——のと軌を一にして、読者にある種の違和感をすら与えるであろう。この点について、レバントは、次のように指摘している。

For example, instead of absorbing the background of the age into the novel — conditions in England and conditions affecting piracy in the Caribbean in the seventeenth century — Steinbeck halts the narration altogether on four occasions to present separate background essays.<sup>5)</sup>

それにもかかわらず、この歴史的事実をストーリーの間に挿入する方法は、後の作品に現われることになるインターチャプター（中間章）を挿入する方法の先駆けをなすものとして注意すべきものであるが、この歴史的事実への言及を全く不必要なものであると考えなくてもよいのではないか。『怒りのぶどう』におけるインターチャプターが、政治的、経済的、社会的背景を与えることによって、作品が社会性を帯びることになったように、『黄金の杯』に史実を

挿入しインターチャプターの性格を持たせたことが、主人公のヘンリー・モーガンの生涯に個人的な生を越えた社会性を与えることになったと解釈できるであろう。

『黄金の杯』の第1章と第5章の冒頭には、他の章にみられる史実への言及がない。この史実への言及の仕方に注目して、これを後の『怒りのぶどう』などにみられる中間章的性格のものとみる見方が可能であるのは上述の通りであるが、一方、作品全体の構成からみると第1章と第5章が中間にある第2章、第3章、第4章の外枠として存在していると考えることができる。第1章では、故郷を出発する準備をしているモーガンが描かれている。モーガンの活躍の場面は、第2章、第3章、第4章で描かれる。モーガンに対する人間的な興味は、彼が海賊になった理由および彼が海賊として活躍した時期にある。とすれば、第2章、第3章、第4章は、躍動的なモーガンの真の姿を描く動的な場であり、第1章、第5章は、それぞれ準備期間と終焉を待つ期間で、いわば静的な場である。

この様式は、次に発表された、第2作目の『天の牧場』(The Pastures of Heaven, 1932)に生かされている。『天の牧場』では、第1章と第12章が外枠として働き、その中間に、10個の物語が配置され、それらの一つ一つの物語がほとんど独立した物語として読めるほど独立性、自立性が強い物語でありながら、互に関連し合って全体で一つの意味を持っているという独特の小説形式をなしている作品となったが、<sup>6)</sup>これは、上述の如く、第1章と第5章が外枠として配置されている『黄金の杯』とはほぼ同形式と見なすことができるのである。ただし、『天の牧場』では、中間に挟まれた10個の物語が独立したものであるのに対して、『黄金の杯』では、中間に挟まれた第2章、第3章、第4章は、それぞれ独立することのできない、連続のものとなっている。この点は大きな違いである。

『黄金の杯』では、構成上の工夫ばかりでなく、さまざまな技巧が工夫されていることにも注目しておきたい。例えば、フラッシュバック、短いエピソード、内的告白、イメージやシムボルなどがそうである。<sup>7)</sup>

### III

ヘンリー・モーガン像は、作者自身が描くモーガンの姿とモーガン自身のことばによって語られる姿とモーガン以外の登場人物たちの目を通して浮き彫りにされるモーガンの姿という三つの方法によって明かにされている。ヘンリー・モーガンは、決して生涯に亘っていかなる不安をも抱かず目的に向かって邁進し続けたわけではなかったし、そのうえ少年時代から大志を抱きながらも絶えず不安にかられつつ生きる、性格的には比較的弱い人物として描かれている。将来について不安を抱くというのはとりわけ青年期に特有の性情ではあるが、青年時代のモーガンも一抹の不安を抱きつつも、希望に燃えている。

モーガンは、パナマ攻略に際して海賊の指揮者として著しい才能を発揮する。モーガンは、パナマ征服の時に、海賊の魂というものを既に知悉するに至っている。そこで、彼は、海賊たちの、恐怖、貪欲、空腹、欲望、虚栄心を巧みに利用する。彼が海賊を思うままに操り、海賊の頭にまで昇り詰めることができたのは、海賊に就いての十分な知識を持ち得たからであり、

海賊の心理を把握し得る才能に恵まれていたからである。モーガンは、なかなかの策士である。彼は、指導力に恵まれ、奸計に長けている。それは、パナマ攻略の時、部下の逡巡を見事な心理作戦によって利用し、攻略成功へと導いているのを見れば明白である。そのような人物への成長と人格形成に与って力があったのは、プランテーションでの体験であるとするのがスタインベックの解釈である。プランテーションでの5年間の年季奉公は、奴隷の扱い方、さまざまな教訓、絞首刑の体験、人を押し量る力、などをモーガンに与えたばかりでなく、これらを身につけたことによって、農園と権力を獲得する機会さえ与えられるが、モーガンはバカーニアになるという初志の貫徹を目指してこの農園主からの申し出を拒否する。

モーガンの性格は、例えば、第2章のⅣによく示されているが、ティママンが言うように総じてよく描かれていると言えよう。

Henry Morgan's character, given the short space of narrative development in the novel, is amply drawn.<sup>8)</sup>

モーガンのカリブ海での君臨は、10年にわたる。彼は、30歳になって不動の名声を手にする。ところが、その時ですら、求め続けていた燃えるような幸福と満足感を得られない。彼は、部下たちが彼の達成した偉業の前で彼にへつらうとき、彼らのへつらう態度を軽蔑する自分自身を発見する。彼は、栄光の中で孤独に陥る。成功の中で友もなく孤独と疎外感を体験する。こうなった以上、彼は、不安、悲嘆、慢心、失敗、少しばかりの弱さを隠して生きて行かねばならないことになる。こうした中で彼は初めて部下であるクール・ド・グリ (Cœur de Gris) が友人となり得る人物であることを発見する。

クール・ド・グリとヘンリー・モーガンを比較するとき、船長たちの見方では、理想の女性ラ・サンタ・ロハ (La Santa Roja) を手に入れる価値のある人物は、キャプテン・モーガンではなく、クール・ド・グリである。

モーガン自身の弱さは、パナマに近づいたとき、いっそう明確にされる。彼の不安を次のようにスタインベックは描く。

Henry Morgan himself was beginning to doubt whether he wished very greatly to go to Panama.<sup>9)</sup>

このように、彼の不安感は昂じて、ついに彼は、彼の望んでいたものがなんであるかさえ思い出せないような心理状態に陥っている。(p.127) 興味あるのは、モーガンが自信喪失による不安感からいっそう不安感をつのらせ、さらに自信を喪失し、一層強く不安をつのらせて行くのとちょうど反対にクール・ド・グリは、ますます気丈になり自分たちの目的意識を明確にし、自らの目的を遂行しようとするに至ることである。

二人の立場の逆転が生じて、アイロニーが生まれる。この逆転が生じた原因は、もとはと言えば、モーガンの目的意識の弱さにある。クール・ド・グリは、賢明にもこれを見抜く。崇高

なものとして粉飾された、水面下に潜んでいる不純な目的、揺れ動く目的意識の故に、動機の不純の故に、パナマ攻略の後でもなお満足感を得られないのである。クール・ド・グリは、“You do not want Panama. It is the woman you want, not Panama.” (p.128) と言う。

L. J. マークスは、「モーガンの冒険と名声は、高貴なというよりはむしろ浅はかな動機に基づいているということをクール・ド・グリは気付いている」<sup>10)</sup>と指摘している。動機の不純と浅はかさは、表面上の目的と内にある目的の相克を生み、不安感を引き起こす原因となる。このあたりの心理を、スタインバックはモーガンとクール・ド・グリの対話を通して、つまり、クール・ド・グリがモーガンの心理を巧みに探り出すという形式にして描き出している。(第4章II)

モーガン自身が、自らの弱さに気づき、クール・ド・グリの強さに驚く場面もある。

“Perhaps we should be resting here,” he said. “The men are exhausted.”

“But no. We must go on and go on,” Cœur de Gris replied. “If we stop here, the men will only be weaker when we start again.”

Henry Morgan mused: “I wonder why you are so avid in my mission.

You move forward when even I begin to doubt myself. What is it that you expect to find in Panama, Cœur de Gris?” (pp.127-128)

一方、海賊たちが、モーガンを見る目はどのようなようであろうか。

For a full minute Captain Morgan looked at him. Then a great, harsh wave seemed to break forth in his chest. He knew that minute how much he had come to love the young lieutenant, knew that he could not bear to lose young Cœur de Gris. Now he had dropped to his knees beside the silent figure.

.....All the pirates saw their cold captain kneeling on the ground, stroking the damp, shining hair of Cœur de Gris. (p.129)

ここには、モーガンが完全にクール・ド・グリに屈服する姿を見る海賊たちの目がある。

次は、コックニー・ジョウズ (Cockney Jones) が盗みを働いたとき、モーガンが思い出す記憶だが、クール・ド・グリがモーガンについて抱く見解が現われている例である。

Cœur de Gris had said that there was no difference between this epileptic dwarf and Henry Morgan. (p.147)

クール・ド・グリの生い立ちに就いては、第3章IIIに詳しく書かれている。真の聡明さに恵

まれているのは、クール・ド・グリであり、彼は、マークスによれば、「ドック・バートン (Doc Burton) とほぼ同じように真実に立ち向かっているように思われる人物」である。「クール・ド・グリこそ人間の愚行に同情し人生の全体的な意味を把握したいと願い、そのためにモーガンや人類に忠誠を尽くしている」のである。<sup>11)</sup> マークスは、マック (Mac) とモーガンの類似性、ドック・バートンとクール・ド・グリの類似性を指摘して、次のように言っている。

Although Mac and Morgan are leaders, their egotism narrows their imagination. Doc Burton and Cœur de Gris, on the other hand, are not “men of action” and, thus alienated from the group, they are capable of viewing it whole and of passing judgment upon it.<sup>12)</sup>

ラ・サンタ・ロハ (=イソベル) は、モーガンに会って、“And have you ruined our poor city enough for your satisfaction?” と非難する。(p.140) ラ・サンタ・ロハの目から見たモーガンは、決して英雄でもなければ、心引かれる魅力的な人物でもなかったようである。むしろ、彼女は、クール・ド・グリを愛していたのである。彼女が求めていた人物は、モーガンのような「夢」見る人ではなかったのである。彼女は、次のように言う。

“...I dreamed that you would come to me one day, armed with a transcendent, silent lust, and force my body with brutality. I craved a wordless, reasonless brutality....

“I wanted force-blind, unreasoning force-and love not for my soul or for some imagined beauty of my mind, but for the white fetish of my body. I do not want softness. I am soft.... (p.143)

モーガンも現実のラ・サンタ・ロハを間近に見て、その期待していた空想上のラ・サンタ・ロハとの格差に失望する。ラ・サンタ・ロハを手に入れるため多くの人を殺戮し、「黄金の杯」つまりパナマを破壊したのに...。その上、モーガンは、彼女が既に人妻であること、さらに彼女がクール・ド・グリに心を引かれていることを知り、ジェラシーから彼を自らの手で射殺してしまう。モーガンが求めていたものとラ・サンタ・ロハが求めていたものとの間には余りにも大きな違いがあり、両者は互いに失望するのである。

モーガンは、修行時代に「残忍ではない」が、「慈悲に欠ける」(p.62) という性格を身につけた後、ときどき「弱さ」を部下たちに見せつつ、数々の征服を果たし、ついには、自らの行為に対して、この上もなく反省を迫られることになる。彼が海賊集団を率いて華々しく多くの征服を果して行ったその裏には、彼の‘egotism’ と ‘self-deception’ がまとわりついていたのである。しかも、彼は、哀れな夢想家であった。

#### IV

『黄金の杯』には、15歳までのモーガンについては描かれていないので、それまでに彼の性格形成に影響を与えたものが何であるかは不分明であるが、しかし、それ以後外界の影響によって受けた変化は、著しいものがある。最初に述べたように、彼のバカーニアとしての晩年は、当時の他の海賊と驚くほど違ったものになっている。彼は、バカーニアとして征服する側からバカーニアを制圧する側へと変身している。その意味で、彼の人生は興味あるもので、スタインベックがヘンリー・モーガンを取り上げた理由もそのあたりにあるのではないかという推測も成り立ち得る。

先に見たように、モーガンは、15歳～20歳という多感な人格形成期をプランテーションという特異な世界で過ごしている。しかも、その時に得た体験が大いに性格形成に影響している。ところが、モーガン自身の訴えによれば、スタインベックが種本として用いた、既述のエスケメリング著『アメリカのバカーニア』は、事実を歪曲している、プランテーションで年季奉公などをした覚えはない、ウェールズ名門の出身で高い身分の出である自分が年季奉公をするはずがないと言うのである。<sup>13)</sup>しかし、スタインベックは、このプランテーションでの時期を重要視しているのである。それは、第2章がモーガンのプランテーションでの年季奉公の時期に於ける生活についての描写に当てられていることから明白である。

一方、モーガンが西インド諸島へ行こうと決意したのはなぜか——ここにモーガンの生涯を決定するものがあったと言えよう。

モーガンを駆り立て西インド諸島へ赴かせたのは、dream である。西インド諸島に行って大金を手に入れて帰ったダフィッド (Dafydd) に刺激された15歳の少年のモーガンが考えるのは、次のようなことである。

He wanted to shout, "I'm on my way to the Indies," to widen their dull eyes for them and raise their respect. Silly, spineless creatures, he thought them, with no dream and no will to leave their sodden, dumpy huts. (pp.30-31)

精神の崇高さにおいて異なるとはいえ、隣人を目覚めさせようとしたことでは、これは、ヘンリー・D・ソロー (Henry David Thoreau) が、ウォールデンの森での体験を記録しようとしたときの決意の強さと似ているように思われる。スタインベックがソローを意識してのことであろうか。

The present was my next experiment of this kind, which I purpose to describe more at length; for convenience, putting the experience of two years into one. As I have said, I do not propose to write an ode to dejection, but to brag as lustily as chanticleer in the morning, standing on his roost, if only to wake my neighbours up.<sup>14)</sup>

さて、モーガンをして絶えず駆り立て行動せしめていたのは、バカーニアになるという dream である。年季奉公を終えた後ポート・ロイヤルに行き、彼は、叔父のサー・エドワード・モーガンに向かって次のように言う。

“There is a thing I wish to speak of, sir. I want to go a-buccaneering, Uncle — on the sea, in a great ship with guns.... (p.76)

しかも、「財産と名誉」を手に入れるために buccaneer になるというのである。彼の行動の基底にあるのは、正にこれである。カリブ海 (the Spanish Main) の覇者となって10年間君臨したキャプテン・モーガンは、「夢」を実現したことになるが、30歳にして再び新たな「夢」を抱く。彼は、“the Red Saint in Panama” と呼ばれる美女を手に入れるために、パナマ攻略を企てる。「夢」の実現は、既設の目標（「夢」）の喪失を意味するわけであるから、モーガンは、「夢」を実現すると新しい目標（「夢」）を設定する。目標の達成と新たな目標設定との間の精神の空隙はできる限り速く埋められるのが理想である。何故なら、精神の空隙は、精神の不安をもたらすからである。彼は、絶えず新たな目標（「夢」）を設定しない訳には行かないのである。

パナマは、スタインベックの記述によれば、次のように豊かで美しい所である。

Panama was a great, lovely city in 1670 when Henry Morgan determined on its destruction; a rich, strong city, and justly called the Cup of Gold. No place in all the raw New World could compare with it in beauty and in wealth.

こうしてモーガンは、パナマ攻略に出かけて見事に成功するのであるが、ラ・サンタ・ロハを手に入れることには失敗し、しかも彼女からはその幼稚さを軽蔑されることになる。

彼の幼稚さについては、マーリン (Merlin) も次のように考えて嘆いている。

“So,” Merlin mused, “he has come to be the great man he thought he wanted to be. If this is true, then he is not a man. He is still a little boy and wants the moon. I suppose he is rather unhappy about it. Those who say children are happy, forget their childhood. I wonder how long he can stave off manhood. (p.108)

モーガンのカリブ海での大活躍について噂を聞いた父親ロバート・モーガン (Robert Morgan) も、彼の「夢」見る姿を思い浮かべつつ、“I was a man and did not want the moon.” と言い、さらに、「ヘンリーは、夢の中で泳いでいる、ときには彼のことをとても羨ましく思うが」(p.109) とマーリンに胸中を吐露している。

ロバート・モーガンは、ヘンリー少年の性格を見抜いて、すでに、次のように言っている。

But I do know; and I say to you, without pleasure, that this son of ours will be a great man, because — well — because he is not very intelligent. He can see only one desire at a time. I said he tested his dreams; he will murder every dream with the implacable arrows of his will. This boy will win to every goal of his aiming; for he can realize no thought, no reason, but his own. (p.12)

モーガンは、「夢」を迫るのみで現実を見ることのできない人間つまり大人に成りきることのできない子供のままの人間だということになる。彼は精神的に成長できないまま大人になってしまった不幸な人間である。彼が、「明確なヴィジョン (vision) を欠き、インテリジェンス (intelligence) に欠けていた」ことがこの哀れむべき結果をもたらしたのである。ティママンの見解は、微妙に異なっているとはいえ詰まるところ妥協の必要を認める点でモーガンが大人に成長していないと見る見解である。

Manhood consists in learning to compromise between civilization and individual freedom. But Henry is possessed by the moon, and he is desperately lonely. That is the price one pays for absolute freedom.<sup>15)</sup>

しかも彼の抱く「夢」は、〈エゴイスティックな「夢」〉である。彼の「夢」はしばしば排他主義に強く支えられた類のものであり、他者を顧みることがない。読者の目に彼が極めて非人間的に写るのは、他ならぬこの彼のエゴイスティックな「夢」のせいなのである。このように抵抗しがたい野心に取り付かれた (obsessed with one overpowering ambition)、一途なモーガンは、ファウスト的であり、例えば、ロージャー・チリングワース (Roger Chillingworth) やセプティミアス・フェルトン (Septimius Felton) のように、たった一つの目的を追求するために人間性を奪われているのだということを自ら発見するとリスクは主張している。<sup>16)</sup>

## V

筆者は、さきにモーガンの生涯は、ただ単に個人的意味を越えて社会的意味を持っているという趣旨のことを言ったが、これは、すなわちモーガンの一生が、いわば17世紀という時代と無関係ではないどころかむしろ極めて深く関わっていたという意味である。

当時のイギリスの植民地政策では、一切を排除し排他的にただひたすら領地を《拡大》して行くというのが国家の目的であった。モーガンは、その長い生涯を通じて、目的追求のために他を顧みる余裕を持たなかった人物であり、その意味でイギリスの植民地獲得による大帝国建

設という流れに沿っていたわけであり、彼自身はたとえ不安につきまといわれ続けていたとはいえ、英雄たり得たと言えよう。モーガンは、結果的に見ると、海賊行為を通して国王と祖国に忠誠を尽くしたことになる。国王は少なくとも彼の業績を評価し世間に示さない訳にはいかなかった。その証拠にモーガンは国王からサー（Sir）の称号を与えられている。（p.181）しかし、モーガンの目的が、国家の目的と離反するようになったとき、彼は、すでに英雄的性格を失っていたのである。彼の行動が、大義名分によって支えられているとき、彼の行動は、極めて潑刺としていて、「夢」の実現を果たすことができるという希望を抱くことができるのである。ところが、パナマ攻略の時のように彼が高邁な目的を見失ったとき、彼の行動は、生彩を失い、同時に彼の生に対する意欲は、減退し、墮落は明かとなる。

当時のイギリスにとってモーガンは、英雄であった。史実の上でも、石島の前掲書によれば、1500年の半ばごろからイギリスが植民地を拡大すべくカリブ海を制覇しようと図って、当然の如く他国と衝突を繰り返していた。イギリスがとりわけスペインと熾烈な覇権争いを続けていたときには、モーガンは英雄であったが、やがて、両国間の関係が良好に転じて、友好関係が芽生え始め、1670年に海賊行為が禁止されると、次第に海賊としてのモーガンは、無用の存在となっていった。イギリスは、スペインと対立していた間はモーガンを大いに利用し、モーガンも英雄たり得たのであるが、友好関係の成立と共に、バカーニアとしてのヘンリー・モーガンは、頓死してしまうわけである。しかも、イギリスは、最終的には、国家目的のために、モーガンを巧みに利用してバカーニアたちそのものの壊滅を図る。

こうしてモーガンは、スタインベックも作品の中で描いているように、祖国の命令により海賊を制圧する側に立ち、かつて仲間であった海賊たちを裏切り彼らに絞首刑を宣告したりしている。（第5章Ⅲ）かくして、モーガンは、自分たちバカーニアが国家に利用されているのに気付いたとき、civilization の持つ真の意味を知ることになる。国家目的の成就と共に、バカーニアは不法の存在となったのである。

## VI

ラ・サンタ・ロハ（イソベル）は、モーガンに向かって“*I find you are no realist at all, but only a bungling romancer.*”と言うが、このことばはモーガンの全てを見事に言い当てているとみて良いであろう。モーガンは、いかなる妥協をも認めず、「捕らえどころの無い夢」（ティママン）を抱いて、盲目的に突き進んだ「夢」見る人であった。モーガンがサー（Sir）の称号をイギリス国王から賜り海賊を制圧する立場に立ったのは決して〈賢明な妥協〉からではなく、〈国家権力への迎合〉からであった。それは、「夢」に憑依されいながら、ついに「夢」破れたものの哀れむべき末路なのである。

言うまでもなく、彼の征服する側の論理は、ただ一方的に相手側を征服し有無を言わず従わせるのみであって、征服される側の論理を最初からいっさい考慮しないものであった。彼は「ソリプシスト」であった。だからこそ彼の〈セルフイッシュな「夢」〉は、存在し得たのである。彼は、“moon”を追い続け、“a bungling romancer”としての生涯を送ることになっ

たのである。スタインベックは、異常なほどにセルフフィッシュなロマンサーとしてのモーガンを浮き彫りにしたのである。

なお、彼の後続の諸作品に現われるさまざまなテーマの中の一つである聖杯探求のテーマは、『黄金の杯』にも見られるが、これはスタインベックの生涯に亘る関心事となり、彼の死後出版されることになった未完の *The Acts of King Arthur and His Noble Knights* (1976) にも見られることとなった。

#### 注

- 1) 石島晴夫『カリブの海賊：ヘンリー・モーガン』原書房、1992、p.13.
- 2) 同上書の年表によるが、取捨選択し必要な事項のみを記した。
- 3) 同上書、p.235.
- 4) 同上書、pp.vi-viii.
- 5) Howard Levant, *The Novels of John Steinbeck: A Critical Study* (Columbia, Missouri: University of Missouri Press, 1974), p.12.
- 6) 要 弘「アルカディアの消滅——*The Pastures of Heaven* について——」(『英米文学・研究と鑑賞、No.38』、大阪府立大学英米文学研究会、1990)
- 7) Levant は、前掲書 *The Novels of John Steinbeck: A Critical Study* においてこれらの技巧の特徴をいくつか挙げて、長所と欠点を詳しく論じている。
- 8) John H. Timmerman, *John Steinbeck's Fiction: The Aesthetics of the Road Taken* (Norman and London: University of Oklahoma Press, 1986), p.47.
- 9) John Steinbeck, *Cup of Gold: A Life of Sir Henry Morgan, Buccaneer, with Occasional Reference to History...* (Penguin Books, 1976), p.127. 以下、*Cup of Gold* からの引用は、すべてこの版による。なお、引用ページは引用文の最後の括弧内に示した。
- 10) Lester Jay Marks, *Thematic Design in the Novels of John Steinbeck* (The Hague・Paris: Mouton, 1969), p.30.
- 11) *ibid.*, pp.30-31.
- 12) *ibid.*, pp.31-32.
- 13) 石島晴夫、前掲書、p.27, pp.192-194.
- 14) Henry David Thoreau, *Walden* (Everyman's Library, 1962), p.73.
- 15) John H. Timmerman, *op. cit.*, pp.52-53.
- 16) Peter Lisca, *The Wide World of John Steinbeck* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1958), p.27.